2022年11月 27日 待降節(アドベント) 第1主日礼拝

メッセージ「物に頼るでもなく、人に頼るでもなく」　　牛田匡牧師

聖書 ヤコブの手紙 5章1-11節

今日から、クリスマスを待ち望む「アドベント」、待降節ということで、先ほども「アドベント・クランツ」のろうそくへの点灯がありましたし、また教会にもクリスマスツリーやリースを飾り付けたり、「クリブ」や「クリッペ」、「プレセピオ」とも呼ばれるイエス様の生まれた場面を模したお人形たちを並べたりしました。保育園でもクリスマス会に向けて、クリスマスの歌や劇の練習をする声が聞かれています。日々、様々なことに追われるようにして過ごしていると、「早くも、もうクリスマスの季節になってしまったのか」というのが正直な感想です。ついこの間まで「残暑が厳しい」と言っていたのに、気付くともう 12 月が目の前で、着る服にも悩んでしまうという方も多いのではないでしょうか。「一体、1 年前のクリスマスや、アドベントはどんなだっただろう」と思って、少し振り返ってみました。

新型コロナウイルス感染症は、2020 年から世界中で蔓延していますが、1 年前の日本は、夏の「第 5 波」の感染爆発から感染者数も減少して、11 月末には一日の感染者数は、全国で 100 名前後まで下がっていました。今は毎日 9 万人ほどですから、去年の今頃とは比べものにならないほどだということに驚きます。また物価についても、去年の時点で、世界中の物資の供給網の混乱から、様々な商品の値上げが、話題ともなっていました。ですが、少なくとも昨年のクリスマスには、まだロシアはウクライナに対して戦争を始めていませんでした。今年 2 月にロシアがウクライナに軍事侵攻してから、世界有数の小麦の輸出国でもありますし、世界中の物資の産出の状況も変わってきています。世界中のあちこちで、ガソリンも、食料品も値上がりを続けているのは皆様のご存じの通りです。

今年の 1 月には「世界終末時計」が残り 100 秒になった。3 年連続で残された時間が短くなり続けている、と報じられていましたが、その後の世界情勢を見ても、明らかに世界は回復の方向には向かっていないように思われます。それこそ一度(ひとたび)核兵器が使用され、さらに核兵器での応戦となれば、この地球自体が生命

の住むことのできない星になってしまいます。またたとえ核兵器ではなく通常兵器であったとしても、「敵基地攻撃能力」などと言って、自国防衛のための先制攻撃を容認したら、疑心暗鬼をつのらせ、結果として戦争のリスクだけを高めることになってしまいます。

一年前よりも、状況がより厳しくなった現在、大阪や東京では、18 歳以下の子どもを対象にお米などの食料品の現物支給をすることが決まったようです。賛否両論、様々な意見があるようですが、本当に必要としている方々のところに、支援が届くことを願います。今日も、私たちはこの礼拝後に、釜ヶ崎におられるホームレスの方々にお渡しするためにおにぎりを作る予定です。ますます生活自体が苦しくなっていっている時代の中で、私たちはどこを見て、歩みを進めていけばよいのか、聖書の言葉に耳を傾けたいと思います。

今回の聖書の言葉は、「ヤコブの手紙」の中の最後の章でした。この手紙を読んでも、今から約 2000 年前も現代と同じように、格差のひどい社会状況であったことが分かります。当時の地中海では大規模な農園を経営する地主たちが、その収穫物を船に乗せて輸出し、それで商売をして儲けていたようです。そしてそのような大商人や大地主の下では、たくさんの農民たちが借金のかたに先祖伝来の土地を没収され、借金の返済のために小作農として日々に汗を流していました。そのような格差社会の状況下で、この手紙の著者であるヤコブは、前半で労働者たちを搾取し、富をむさぼった金持ちたちに、警告を発しています。「世の終わりの日には、あなたたちは厳しく裁かれるだろう。あなたたちの体は火で焼き尽くされるだろう」というのは、とても恐ろしい言葉です。

続く後半では、搾取され、虐げられて弱く小さくされている人たち、労働者たちに向けて、「きょうだいたち」と呼びかけて語られています。「農夫が、収穫の時をじっくりと忍耐して待ち続けるように、主が再び来られる終わりの時まで忍耐しなさい」。こんな風に言われると、「どんなに困難があっても歯を食いしばって耐え続ける」ことのように思ってしまいますが、そのようにしていたからと言って、必ずしも豊作になるわけでもないのが農業です。ここで言われている「忍耐しなさい」とは、

「めげることなく、気を長く持って、心をぐらつかせない」ということです。「主が来られる時が近づいている」（8）とは、その後に「見なさい、裁く方が戸口に立っておられます」（9）とあるように、「もう今すぐそこ、目の前の戸口にまで来ていますよ」ということです。

「主が来られる日」「再臨の日」とは、世界の「終わりの日」であり、最後の審判、裁きの日であると、古くから考えられてきました。この手紙の言葉遣いも、そのような思想を反映しています。しかし、ここで「来臨」や「再臨」と難しい言葉で翻訳されているギリシャ語（パルーシア＜パラ・ウーシア）の元々の意味は、もっと素朴に「そばにいる」です。

自然災害や天変地異、戦争や混乱する社会情勢など、世の終わりを感じさせられる時代の中で、「終わりの日」には「人の子が雲に乗ってくる」（ダニエル7：13）と言われているものの、その言い伝え通りのことがなかなか実現しない、ということは昔からずっと続いてきていました。しかし、聖書の中には、そのような批判に答える形で、「主の日は、空き巣泥棒のようで、『もう来ていた』」（Ⅱペトロ　3：10・本田哲郎訳）とも、「今が終わりの時です」（1ヨハネ2：18）とも記されています。神様は「いつか来られる」「これから来られる」のではなく、もう「既に来ている」、来られていて私たちのすぐ「そばにいる」、というのです。

だから、神様がいつか来られる日を待ち望んで、歯を食いしばって現状に我慢するのではなく、今も確かに隣にいて下さっている、だからこそすぐに結果が出なくても、諦めることなく、めげてしまうことなく、やがて来るはずの収穫の日を待ち望むことができる、その力を与えられているということ、そのことに信頼するということなのではないでしょうか。

生活が苦しくなればなるほど、私たちは目の前の問題の即時解決を望みます。もちろん私たちには食べ物も着る物も休む場所が不可欠ですから、それらがない時にはそれらの物を求めます。周りに誰も助けてくれる人がいないときには、誰か助けてくれる人を求めます。それらはその場その時に必要なことです。しかし、では私たちの周りに物と人とが十分にあれば、それだけで私たちは満たされていると言うことができるのでしょうか。私たちの命、霊（たましい）、自分自身（プシュケー：存在全

体そのもの）というものを考えた時、周りに十分に物があり、人もいるけれど、自分は何だか満たされていない、と感じることもあるのではないかと思います。私たちが満たされ、満足した命を歩むためには、物に頼るのでもなく、人に頼るのでもなく、自分自身が神様から目的を与えられ生かされている命であることに気づくこと、今もすぐそばにおられて、絶えず支えてくださっている神様がいるということに信頼することなのではないでしょうか。

神様はいつの日か、雲に乗ってやって来るのではなく、2000 年前のクリスマスに人間の赤ちゃん、最も弱い存在として、家畜小屋の飼い葉桶の中という社会の片隅で世に来られました。それは 2000 年を経た今でも、神様はこの社会の最も暗くされた片隅に働かれるということ、神様は私たち一人一人の人間の手を通して働かれるということを示しています。だから私たちは、「いつ世界の終わりが来るのか」「何に頼ったら、天国に入れるのか」などの嘘偽(うそいつわ)りのデマやカルトに惑わされる必要はありません。命の神は、イエス・キリストとしてもう既に来られています。そして十字架の死から引き起こされて、今もすべての人と共に、そのすぐそばにおられます。だからこそ、私たちは困難があっても、諦めたり、投げ出したりせずに、めげずに立ち続けていくことが出来るのだと思います。そのような神様と共にあって、私たちは今日もここから歩み出していきます。